
アントネッロ・ダ・メッシーナ作《受胎告知の MARIA》
—肖像画とイコンのあい—

十五世紀にアントネッロ・ダ・メッシーナが描き、現在パレルモ州立博物館に所蔵されている《受胎告知の MARIA》(c. 1475-76)は、同時代イタリアで描かれた「受胎告知」とは極めて異なる表現で描かれている。MARIA の上半身は、ほぼ正面方向からクローズアップで捉えられ、彼女が向き合うのは告知の天使ではなく観者である。これは、イコンや礼拝用の半身像に見られる表現である。一方、彼女の風貌は、「地中海の少女」と呼ばれるように理想化されていない。その写実性のみならず、無地の背景、鑑賞者に向かうまなざしなどは、アントネッロが描いた肖像画の表現と共通している。つまり、彼は、イコンを肖像画のように、ひるがえってみると、肖像画をイコンのように描いたといえる。なぜそのように描いたのか。本発表では、先行研究であまり触れられてこなかった肖像画の側面から、画家が意図したであろう表現の効果を探る。

まず、作品の良好な保存状況から、個人礼拝用の MARIA 像であった可能性は低い。家庭において日々の礼拝に用いられていたならば、玄関口や寝室などに祀られ、埃や湿度、蝋燭の炎や煤、手や唇による接触で磨滅し劣化を免れなかったであろう。したがって本作品は、別の目的のために所有され見られていたと考えうる。その目的のひとつが、肖像画、なかでも MARIA に扮した「扮装(偽装)肖像画」である。

そこで次に、当時の MARIA 像および肖像画がいかに受容されていたのかを参照して、モデルとなる人物像を検証する。同時代において、聖母が理想の女性像として捉えられていたこと、書物を持って描かれるようになった時代背景、絵画を注文し所有できる人物の社会的地位などを鑑みると、たとえば、同じ名前を持つイッポリタ・MARIA・スフォルツァのような人物の可能性が考えられる。肖像を見る者は、彼女の母やアントネッロを宮廷画家として招こうとした兄ガレアツォなど、周辺人物をも想起するであろう。つまり、鑑賞者がここに見るのは、モデル本人にとどまらないのである。

このことは、ハンス・ベルティング(1994)が「みずからの姿ではなく、受難のイメージを見るために描かれた鏡」と表現した十五世紀の小型礼拝像の機能に相通じる。したがって、ここで再びイコンの機能に立ち戻らねばならない。ドミニコ会修道士フラ・ミケーレ・ディ・リッラ(1476-79)は、「アヴェ・MARIA」を繰り返し唱えれば救済者イエスを繰り返し誕生させられると説いた。同じように、本作品の前で祝辞を述べる者は、大天使ガブリエルになり代わってキリスト教の始まりとなる出来事を再現しうる。さらに観者は、「キリストの受難」やガブリエルによるもう一つの聖告「MARIA の死」にまで至る複数の物語をもまた想起するであろう。つまり、ここに見られるのは、「受胎告知」のイメージのみにとどまらないのである。このように、アントネッロによる表現の効果は、肖像画とイコンのあいにおいて、その二面性にこそ読み取れるのである。